

石川県立美術館開設50周年記念

遠き道展 - 伝えたい日本画の今 -

■ **大名の嗜み** - 茶の湯と文房具 -

前田育徳会尊經閣文庫分館

■ **特集展示** 茶道美術名品選

第2展示室

■ **特集展示** モデリングと素材との対話

第4展示室

- コレクション展示室 主な作品
- 講演会報告
- 展覧会回顧
- 行事案内
- 所蔵品紹介



稲元 実 21st C 水の星 「遠き道展」より

遠き道展 —伝えたい日本画の今—

主催／石川県立美術館

後援／石川県・富山県・福井県・金沢市各教育委員会、厚生労働省、文化庁、全国盲学校長会、社会福祉法人日本ライトハウス

1月4日(月)～2月7日(日)会期中無休

平成二十年の一月から全国を巡回し、現代日本画の潮流をご覧頂く「遠き道展」は当館で十二回目の開催となります。

「遠き道」は「皆使命を受けてこの世に生を受けている。(中略)私は、絵を描くという使命の遙かなる精進の過程にいたるだけなのです。」という日本画家・加藤東一氏のことばに由来しています。その名の通り、一朝一夕ではなし得ない、自己の芸術の完成を目指し、はてなき精進をつづける三十八名の画家たちの作品約七十点が並びます。

日本画とは

洋画の定義が難しいように日本画の定義も難しいものです。「日本画とはなにか」「日本画と洋画はどこがちがうのか」と疑問を持っている人も多いようです。歴史を遡れば、明治期に西洋から輸入された、油彩画の対概念として発生した経緯をもつ言葉です。岩絵の具、膠、墨、絹、和紙などを用いて描かれる物と定義することもできそうですが、アクリル絵の具を初めとする新出の画材を用いている画家も多く、既に材料面においてのみ定義することは難しい現状です。モチーフにしても花鳥風月や歴史画に代表される伝統的なモチーフを選んで描いている作家も少なくなっ

てきています。日本画というジャンルは、画材や技法、モチーフなどで定義することがナシセンスであるのかもしれませんが。

垣根をこえて

今回の展覧会は日展、院展、創画展さらには無所属まで、各公募展の垣根を超えて多様な作品群を発表する作家達によって構成されています。また、年齢的にも若手と言われる層から既に大家といわれる芸術院会員まで多様な年齢層です。また作風もいわゆる「日本画」らしい作品から「日本画」らしくないものまで多彩です。これらの作品約七十点を一堂に会しご覧頂くことで、見る者を魅了してやまない、日本画の持つ確かなエネルギーと魅力を実感していただけるでしょう。

出品作家によるギャラリートーク

また、今回の展覧会では、毎週行われる「出品作家によるギャラリートーク」が魅力の一つです。実際に制作した作家の思いを直に聴くことができる機会というのは滅多にありません。それも現在のアートシーンを代表するそうそうたるメンバーばかりです。これを機会に「日本画」に対する理解を深めてい

新年のご挨拶

館長 嶋崎 丞

あけましておめでとうございませす。

本年も皆さん方のご支援ご協力をえて、美術館の運営に当たっていろいろとお祈り申し上げますので、よろしくお願い申し上げます。

当館は昨年で開設五十周年半世紀を経過し、本年より後半の五十一年目に入りました。全国的に見ても、第二次世界大戦後に設立された県立美術館としては、歴史と伝統を有する美術館として位置づけられるように成長してきたと思っております。

近年「美術館」という従来からの概念が随分と変わってきました。変わってきたというより多様化の方向に展開しているというのが正しいかも知れません。美術作品の表現手段も伝統的な枠組みから離れて、自由な発想に基づく制作が盛んに行われ、美術館活動も鑑賞と同時に、種々の体験的な事業も



平面鑑賞レリーフ



土屋禮一 椿樹



中町力 MONT-PARNASSE

ただければ幸いです。

視覚にハンディキャップのある人への平面鑑賞の試み

今回の展覧会のもう一つの大きな特色は、視覚にハンディキャップのある人に対して平面鑑賞ができるような様々な試みがされていることです。例を挙げるとさわれる縮尺日本画、レリーフ、触図録、音声ガイドなどは常時用意されており、蜜蝋を用いて自分で描いた絵をさわって確認できるワークショップ、ことばによる鑑賞ガイドツアーも用意しております。

す（要申込み）。「全ての人を美術館に」という本展覧会の強い熱意が感じられる取り組みとなっています。

新春にふさわしい日本画の展覧会となっています。来館者が「あつ」と息をのむ展示も企画しています。是非、現代日本画の魅力を堪能してください。

行われるようになってきました。こうした新しい流れに対応した活動も当然取り入れて活動を展開していくことも当然必要ですが、その基盤をなす伝統の持つ素晴らしさも決して忘れてはなりません。当館は「地方色豊かな美術館造り」を使命に掲げ今日まで活動を続けてきました。この石川県の地に育まれた歴史と伝統、そこに形成された風格を大切に、今後共活動を続けて参りたいと思っております。

遠き道展 関連行事

◆出品作家によるギャラリートーク

月 日	講 師
1月4日(月)	西田 俊英氏 (日本美術院同人・評議員)
1月10日(日)	稲元 実氏 (日展評議員) 加藤 晋氏 (日展会員)
1月17日(日)	那波多目功一氏 (日本美術院理事、日本芸術院会員)
1月24日(日)	中町 力氏 (日展会員) 山田 毅氏 (日展会友)
1月31日(日)	宮 いつき氏 (創画会会員) 岡村桂三郎氏 (多摩美術大学教授)
2月7日(日)	土屋 禮一氏 (日展理事、芸術院会員) 松生 歩氏 (京都造形芸術大学教授)

視覚にハンディキャップのある人を対象にした催し物

◆ワークショップ

「描いて触ろう自分だけの絵」

時 間／12時 会 場／当館ホール
講 師／蜜蝋ペン開発者と出品作家の方数名がサポートします。

◆ことばによる鑑賞ガイドツアー

時 間／14時 会 場／1F展示室

※いずれも要申込み

〇七六一二三一一七五八〇

石川県立美術館

■開館時間

午前9時30分～
午後6時まで
(入館は
午後5時30分まで)

■観覧料

一 般	観 覧 料
800円(600円)	
大学生 600円(400円)	
高中小生 200円(100円)	

() 内は20名以上の団体料金

茶道美術名品選

1月4日(月)～2月7日(日)会期中無休

初釜の季節に合わせて、「加賀藩関連の伝来茶道具」には、前田家伝来「黄天目茶碗」をはじめ、千利休から加賀藩二代利長へ伝来したといわれる「濡鷺釜」や、四代光高夫人亀姫の婚礼調度の内容品「蒔絵菊に流水図葵紋錫縁香合」のほか、金沢市文「高山右近書状」(所蔵品紹介参照)や、本多家伝来の「竹蒔絵浪に亀図二重切花入」(千利休作)・「銅獅子香炉」・「狂言袴茶碗」等です。

「仙叟宗室と加賀―大樋焼と寒雉の釜」の大樋焼は、前田家の茶堂・仙叟宗室が寛文六年(一六六六)に加賀に下る際に、楽家四代一入の弟子・

土師長左衛門(初代大樋長左衛門)を同道した事に始まります。県文「鉛釉烏香炉」をはじめ、「鉛釉蟹五角香合」・「鉛釉寿亀香合」・「鉛釉獅子香炉」・「鉛釉赤茶碗」(以上初代作)や、「鉛釉梅形香合」・「黒釉富士絵茶碗」(以上五代作)を展示します。一方初代宮崎寒雉は加賀に住した鑄物師で、その侘びた趣は仙叟に好まれました。「段々釜」・県文「葫蘆様釜」・「福寿海尾垂釜」を展示します。

「初春を寿ぐ」では、初春を寿ぐ「消息」(小堀遠州筆)をはじめ、「歳旦和歌」(近衛龍山筆)・「七人猩々図」(狩野常信筆)・「色絵花笠香合」(野々村仁清作)・「瀬戸茶入 銘老松」・「蒔絵松竹梅図錫縁香合」・「青貝福祿寿図香合」・重文「色絵梅花図平水指」(野々村仁清作)・「祥瑞瓢形徳利」等です。



重文 色絵梅花図平水指 野々村仁清作

大名の嗜み

—茶の湯と文房具—

1月4日(月)～2月7日(日)会期中無休

加賀藩では初代利家以来、代々の藩主は茶の湯に深く心を寄せています。利家は千利休や織田有楽に、二代利長は利休と高山右近に茶の湯を学んでいます。三代利常は小堀遠州と親しく交わり、茶の湯をはじめ、名物裂収集等にも多大な影響が確認されます。四代光高も父とともに遠州に茶の湯を学び、一方金森宗和の子七之助に始まる代々を前田家が召し抱えたことから、加賀は宗和流発祥の地ともいわれます。さらに千家三代宗旦の子で裏千家四世の仙叟宗室は、茶堂として利常や五代綱紀に仕えました。このように加賀は、茶の湯をはじめ様々な芸道の盛んな地域として、その伝統は今日に脈々と続いています。

今回の展示では、茶道具に文房具を合わせて展示しますが、「綺麗さび」と呼ばれる美意識の茶の湯を確立した遠州の大名茶では書院飾りとして、遠州が崇拜した藤原定家書写による古典文学の詩文とともに、文房具が飾られました。そこには中国の文人思想を背景とした文化の成立が認められます。前田育徳会が蔵する文房具は遠州や利常の収集品が多く、茶道具や名物裂とともに、両者の精神文化の共感ともいえる世界が反映されています。茶道具に名物裂や文房具など約五十点の展示ですが、同時開催の「茶道美術名品選」(第2展示室)とあわせてご鑑賞いただき、新春のひと時をお過ごし下さい。

千利休書状

主な展示作品

1月4日(月)～2月7日(日)会期中無休

近現代工芸

寺井直次 蒔絵箱「鳴き渡る」



二代浅蔵五十吉「構成の美花器」
西出大三「截金彩色鶏の合子」

日本画

百々俊雅 「夢想」



仁志出龍司「生々」
戸田博子「窓辺の静物」

彫刻

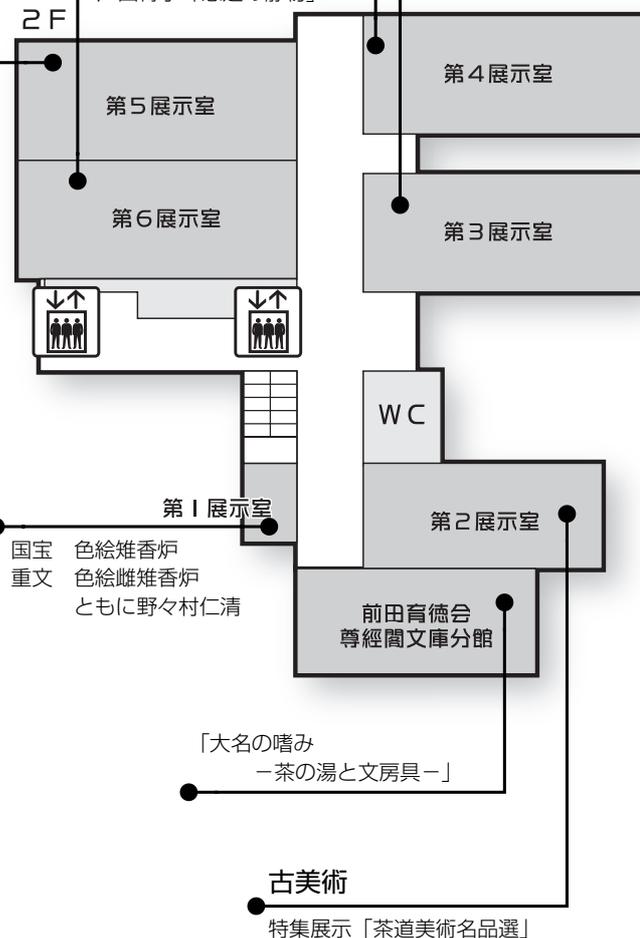
特集展示
「モデリングと素材との対話」

油彩画

上條陽子「女神」
山田勝明「大地の塔」



脇田 和「連理」



国宝 色絵雉香炉
重文 色絵雌雉香炉
ともに野々村仁清

「大名の嗜み
-茶の湯と文房具-」

古美術

特集展示「茶道美術名品選」

モデリングと 素材との対話

1月4日(月)～2月7日(日)会期中無休

ご存知のように彫刻ジャンルでは、用いる素材や技法などによって、モデリング（彫塑）とカービング（彫刻）に大別されます。モデリングによる制作では一般的に、心棒を作りそれを中心に可塑性の高い粘土や石膏などの材料を盛り上げて肉付けを行い原型を完成させ、ブロンズを代表とする別の素材に置換して作品化するのが大方の制作の流れとなっています。ちなみにカービングは、石や木など既に存在する実在の塊を彫り進めて作品を形作って行くものです。

展示構成は、蠟型鑄造・石膏像・FRP（繊維強化プラスチック）ブロンズ・セメント・乾漆・クレイワーク・テラコッタの各小テーマを設け制作技法と用いる素材にも注目する多角的な観点からモデリングの仕事をご鑑賞いただくもので、館蔵のモデリング制作による彫刻作品のなかから特に、素材性の特徴を發揮している作品を中心として展示するものです。

また「遠き道展」に併せて「触れてみる小彫刻展」も開催いたします。



山瀬晋吾 波乗り

「夕顔棚納涼図」―描かれた追憶の家族―

松嶋 雅人 氏（東京国立博物館特別展室長）

《夕顔棚納涼図》は、久隅守景の代表作として知られています。この作品については、かつて吉沢忠氏が「夕顔の咲ける軒端の下涼み 男はててれ女はふたの物」という木下長嘯子が詠んだ和歌の情景を描いたものだとする解釈を発表され、「ててれ」を禪ではなく襦袢をまとった姿で描いていることは、北陸地方の方言の影響であるとして、守景の金沢滞在中に制作された作品と位置付けられました。

しかし作品を詳しく見ると、たとえば夕顔は花ではなく実ですし、子供も描かれているなど、長嘯子の歌の内容とは完全に一致しません。そして私には、「天下至楽」と評された長嘯子の歌の情景を描いたにしては人物の表情がどことなく淋しげにも思われます。そこで描かれたモチーフから、この作品がどの季節のいつの時点を描いたのか、そして守景は何を描いたのかを確認したいと思えます。

最初に、家族の納涼を描いていますが、男が襦袢をまとっているように画面からは盛夏の暑気は伝わってきません。そして夕顔は花ではなく実ですから季節は晩夏から初秋です。さらに、画面の人物が揃って見ていると考えられる月は、上部を明るく描いていることから昇ってきた月で、時刻は夕方から夜と考えられます。

そして、江戸時代は夕顔の実として瓢箪が描かれていましたから、山中に棲む仙人の持ち物からの連想で、瓢箪は世俗を離れる憧れや隠逸をあらわしています。またほおづえをつく男は、《弥勒

半跏思惟像》やドイツ・ルネサンスの画家デューラーの《メランコリアI》と同じく、何かを考えるポーズということが出来ます。さらに描かれた三人ですが、農夫の一家団欒の情景とみることが出来ますが、気骨ある男の表情からすると、女をその妻と考えると若すぎるように思います。そこで、女は守景の娘雪（二六四二〜八二頃）、子供は同じく守景の息子彦十郎（一六五〇〜一七三〇）を象徴していると想像することはできないでしょうか。

守景の妻は狩野探幽の姪で、娘も息子も狩野派の門人でした、しかし娘は同じ狩野派の門人と出奔し、息子も他の門人に殺意をほめかすなどの不行跡で佐渡に流されています。守景が狩野派を破門されたと伝えられるのは、幕府の御用絵師として官僚機構的な立場にあった狩野派の門人として、子供たちの一連の不行跡に対し親としてけじめをつけたことによるとする見方が今日有力です。そして守景はその後子供たちに会った形跡はありません。それゆえ、脱俗や隠逸をあらわすモチーフから《夕顔棚納涼図》はある種理想の世界を描いています。人物の淋しげな表情から、そこに描かれているのは守景の離散してしまった家族への追憶ではないかと私は想像したいのです。

平成二十一年九月二十七日に、「久隅守景展」の関連企画として当館ホールで開催された講演会の内容を、当館の責任において要約したものです。



久隅守景展

1月の行事案内

24日(日)	<p>■キッズプログラム 十三時三〇分～ 広坂別館和室 要参加費</p> <p>「きじっこ茶会」 ※小学生親子対象 要申し込み(締め切り一月十二日) 申し込み方法等詳細はお問い合わせください。</p> <p>電話 ○七六一二二二一七五八〇 石川県立美術館 普及課</p>
16日(土)	<p>■土曜講座 十三時三〇分～ 当館ホールにて 聴講無料</p> <p>「茶の湯の美(2)」 講師 高嶋 清栄 学芸第二課担当課長</p>
23日(土)	<p>「現代の絵画I」 講師 二木伸一郎 学芸第一課担当課長</p>
30日(土)	<p>「現代の彫刻」 講師 宮 衛 学芸第二課長</p>

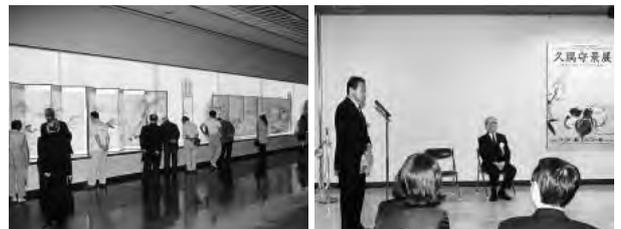
地道に地域の文化に新たな価値を見いだしてゆくことは、公立美術館の重要な使命です。当館の開設五十周年を記念して「久隅守景展」加賀で開花した江戸の画家」を開催したのも、久隅守景の画業を当地加賀の文化風土を江戸との緊張関係から捉え直し、謎の画家守景の代表作がなぜ加賀の地に多く遺されたのかを展望することで、守景の精神的背景に僅かでも光を当て、さらに広く理解される一助となればとの思いからでした。

今回の展覧会の一つの成果として、守景生涯のテーマは人間の理想的な状態を描くことだったこと。そしてこうした深遠な思想を、親しみやすい

表現で具現していることが守景の獨創性であり、魅力であることを確認することができました。守景に関する初の本格的な回顧展だったこともあり、本展には全国から愛好者が訪れ、鑑賞者の図録購買率も通常の5%を大きく上回る15%に達するなど、好評を得ることができました。これらはひとえに国宝《納涼図》を全会期展示することを許可いただいた東京国立博物館をはじめ、所蔵者各位のご高配の賜物であり、ここに改めて御礼申し上げます。また、全国的に本展を紹介いただいたメディア各社にも感謝申し上げます。

■遠き道展覧関連行事として

出品作家によるギャラリートーク、視覚にハンディキャップがある人向けのワークショップがあります。詳細情報は3ページに掲載しています。





(釈文)

一兩日不懸御目

御床布候 仍先日之

鶴之羽はうき御ゆ

い候は、少見申度候

ゆわせ候者今晚参候間

ほんに見せ申度候

此ふみ箱に待申候

かしく

十一月廿六日 等伯 (花押)

(封紙ウワ書)

休庵公御床下 南坊

高山右近が金沢の家柄町人である片岡休庵に宛てた茶事に係わる書状です。キリシタン大名

高山右近は、利休七哲の一人に数えられ、南坊・等伯などと号した茶人ですが、天正十五

(二五八七)年、豊臣秀吉のバテレン追放令により領地を失い、同十六年秋頃より前田利家に

身柄を預けられ金沢に下ったといわれ、利家没後は利長に仕え、金沢城や高岡城の修築に携

わっています。慶長十九(一六一四)年には徳川家康のキリシタン国外追放令により正月十七

日に金沢を去るまで、右近は信仰と茶の湯三昧の生活を送ったといわれます。片岡家は越前府

中より利家に従って金沢に移り住んだ家柄町人で、茶道の嗜みが深く、前田家の御茶堂を務め

ています。天正十三(一五八五)年、越中の佐々成政討伐の後、豊臣秀吉は金沢城で利家に

饗応を受けますが、その茶会に御茶堂を務めたのが片岡孫兵衛休庵です。休庵は右近の姪を妻

に迎えています。後には、この片岡家に江戸の画人で狩野探幽門下の久隅守景が、前田家に招

かれた際に滞在しています。

書状の内容は、茶の湯に用いる鶴の羽箆が出来上がったので見せたい。ゆわせた者が、今晩

来るからあなたにも来てほしいので、返事を待つというものです。右近の金沢滞在中の足跡を示す貴重な書状です。

(第2展示室「茶道美術名品選」に展示中です)

次回の展覧会

前田育徳会尊經閣文庫分館
第2展示室 (古美術)

能面と能装束
— 武家の式楽 —

第5展示室 (近現代工芸)

石川県の工芸

第6展示室

書家 青山 杉雨

ご利用案内

コレクション展観覧料
一般 350円(280円)
大学生 280円(220円)
高校生以下 無料
※()内は団体料金

今月の開館時間
午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間
午前10:00～午後7:00

— 1月の休館日は1日(金・祝)～3日(日)です —

石川県立美術館だより 第315号
2010年1月1日発行(毎月発行)

〒920-0963 金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580 Fax:076(224)9550
URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>